

くらがね通信

No.75 (冬号)

乗鞍岳と飛騨の自然を考える会

2019年1月25日発行

<http://iidalaw.net/norikura.html>

第19回総会・環境講演会を開催します

3月2日(土)に当会の第19回定時総会を開催します。平成30年の事業及び決算報告、平成31年の事業計画及び予算案その他について審議致します。

また環境講演会も行います。講師には2017年にも講演していただいた松田勉さん(富山県雷鳥研究会事務局長)をお招きし、「立山信仰とライチョウ～ライチョウと人とののかかわりの歴史を学ぶ～」と題して前回とは少し違った視点から講演を行っていただきます。

いずれも会場は高山市民文化会館(2-5)です。総会・講演会に是非ご出席ください

環境講演会：13時30分開場 14時開演～15時30分頃まで

第19回総会：16時頃～

なお総会に出席できない方は同封の委任状のご提出をお願いします。

乗鞍自動車利用適正化協議会に要望書を提出

当会は乗鞍自動車利用適正化協議会に対し以下の内容の要望書を提出しました。

乗鞍自動車利用適正化協議会

会長 國島芳明 殿

乗鞍岳と飛騨の自然を考える会

会長 飯田 洋

要 望 書

現在、乗鞍自動車利用適正化協議会(以下「協議会」という)は行政及び観光関連業界(団体)によってのみ構成されており、長野県における乗鞍岳自動車利用適正化連絡協議会のような、自然保護団体や山岳会、学識経験者等は含まれていません。

高山市が「生物多様性ひだたかやま戦略」（基本構想編、行動計画編）を掲げ、市の様々な環境施策において、市民の参加を促し、市民、事業者及び行政が連携し相互に協力体制をとりながら進めることとしているにもにもかかわらず、中部山岳国立公園に位置し、生物多様性保全のための重要なエリアである乗鞍岳の自動車利用適正化について協議する場に、市民や自然保護団体等が参加できないのは大変遺憾なことです。

毎年開催される「乗鞍フォーラム」も、本来は、市民や事業者が生物多様性戦略の実現に向けた研究や討議について理解を深め、かつ、環境保全と観光振興について議論するための場であることから、協議会において、市民や事業者に対して積極的に情報を提供し参加を促す必要があります。しかし、市民や自然保護団体等には、直近になってから日程や議題を一方的に通知するだけなので、参加者は観光関連業界の関係者が中心となり、当然、充実した議論等もできず、半ば形骸化しています。

また、協議会の重要な目的の一つに自然環境の保全が挙げられ、乗鞍自動車利用適正化方針H30-32には、様々な「規制実施、広報計画、自然保護推進、環境への配慮」等が盛り込まれていますが、自然保護団体や山岳会等の意見は全く反映されていません。

因みに、乗鞍岳においては、有料道路スカイラインの無料化と同時にマイカー規制が始まったため、自動車利用のオーバーユースはなくなり、各種保全措置の実施により、雷鳥の生息数や高山植物群落は復活傾向にあります。しかし、依然として、多くの入山者による高山帯の登山道の荒廃は続いており、入山禁止区域への観光旅行者の侵入も後を絶ちません。

乗鞍岳が、観光面でも最重要な基盤となる自然環境であると位置づけられる以上、その保全のため、乗鞍岳のコアエリア、バッファゾーン等の動植物の生息状況等の研究を国、県及び関係団体等と連携して進め、市民と事業者に情報提供していくために、協議会を自然保護団体、山岳会、学識経験者及び市民等、乗鞍岳に関わる様々な人々を網羅した構成員に改めるよう、強く要望する次第です。

ライチョウ会議の19年

直井清正

ライチョウ会議が始まったのは、2000年8月でした。当会の設立が同年3月でしたのでほぼ同時に始まったとみてよいでしょう。第一回と第二回は長野県の大町博物館でした。その時、私は当会として出席、乗鞍岳の現状を発表せよとのことで、マイカーによる入山者の実態を発表しました。ペット連れの観光客や当時、流行していたオフロード四駆による桔梗が原侵入事件、車の渋滞で桔梗が原、西斜面がトイレトペーパーで白く雪景色のようになった事例などを話しました。今では考えられないような事態が起きていたのです。当時、各地のライチョウ生息地での研究が発表され、ライチョウの遺伝子の研究が進められていることを知りました。また今日のようにビジネスホテルなど少ない時代でした。そのため会場周辺の宿で、専門家の先生と同じ部屋で研究のことなどライチョウ以外の興味深い話を聞くこともできました。その後、ライチョウ生息地を抱える県が、持ち回りでライチョウ会議を引き受けることになりました。

2003年乗鞍スカイラインのマイカー規制が始まり、2004年第5回ライチョウ会議が高山市民会館で開催されました。ここで南アルプスでのライチョウが危機的な状況であることが発表されました。その後、ライチョウの保護増殖に向けた活動となって行きます。

2009年東京大会では上野動物園でのスバルバルライチョウの保護増殖事業が公開されており、参加者一同、非公開部での視察もできました。そして人工飼育での飼料がペットのウサギ用

ペレットが最適と聞き、改めてライチョウが草食鳥類？であることを認識しました。そして会場の参加者も鶏の飼料会社、動物園関係者など今までとは変わってきました。

この年5月白山で70年ぶりにライチョウのメスが発見され大きな話題になりました。そして早速、石川県は県を挙げて2010年ライチョウ会議を開催することになりました。この会議でもスバルライチョウの保護増殖活動を各地の動物園などに広げ、飼育技術の向上、万一の時のリスクの分散などが発表されました。こうしたことの背景には日本のトキ絶滅の原因？とも、なった人工増殖の失敗があったと言われます。ライチョウであれば最も近い亜種スバルライチョウでの保護増殖技術を確立して、初めてニホンライチョウの保護増殖に取り組めるということです。そして域外保全への取り組みは上野動物園、富山市ファミリーパーク、いしかわ動物園、長野市茶臼山動物園などに広がって行きます。

2012年、ライチョウは絶滅危惧Ⅰ類となり保護対策も強化されることになります。そして第13回ライチョウ会議岐阜大会は当会が実行委員会となり**高山市で開催**。乗鞍岳でのライチョウ域内保全に向けての取り組みが信州大学の中村先生より発表されました。ライチョウ母子を夜間、荒天時の間ケージ内に保護し、通常時は研究者が見守る取り組みです。2013年乗鞍岳での「ライチョウのケージ保護」が実行され成功しました。その秋、山梨県でのライチョウの会議に出席した時の原稿が、当時の編集の都合で没になっていましたので少し長いのですが改めて以下に掲載します。



『くらがね通信 NO.54 号に記載されたライチョウケージ飼育見学については中村先生との連絡がつかず、しかも放鳥日も一日ずれるなど会員の皆さんに連絡することが出来ず申し訳なく思っています。飼育実験成功とのことで第14回ライチョウ会議山梨大会に11月3～4日に参加しました。嬉しかったのは岐阜県からの参加者が、私と野鳥の会岐阜会長、会員のIさん、そして乗鞍で仕事をされているSさんの4名あったことです。相変わらず岐阜県などの行政機関は参加しなかったようです。「世界自然遺産」登録を目指す高山市も、今年予定されている静岡大会には参加されることを望んでいます。

南アルプス市に初めて知ったのですが、山梨、静岡、長野の南アルプスを取り巻く各県はすでに「世界自然遺産」登録を目指して協議会のような物を立ち上げているようです。ライチョウ始め自然保護に熱のない岐阜県の尻をたたきながら登録を目指す市長のご苦労はいかばかりかと心配する次第です。ライチョウ会議では中村先生の「ケージ」飼育成功を受けて、南アルプス仙丈岳での本格的な保護活動を始めたいとの発表や、地元でニホンジカ防除柵作りの活動をされているNPOの活動の発表がありました。

興味を持ったのは昨年（2012年）の高山大会でも発言された、富山の松田さんの北アルプス北端の朝日岳でのライチョウの生態です。オオシラビソの林の樹上でディスプレイをするライチョウの写真があり、林内には小さな草地が開けていたそうです。残念ながら巣は探せなかったそうです。近い将来、亜高山帯で繁殖するニホンライチョウが発見されるかもしれない、そんな期待が持てそうな発表でした。

今回、何が印象に残ったかというと、肝心のライチョウよりも4日午後からの高円宮妃の講演会の警備です。2002年9月30～10月2日にかけて高円宮殿下と妃殿下が飛騨センターで開催された国際法医学会シンポジウムに来高されました。そのとき鳥好きな妃殿下の要望で、市内

での個人的なバードウォッチングの案内を頼まれました。最も鳥の見にくい時期でお断りしたのですが、それでも良いからとのことで宮川親水公園を案内することにしました。結果は台風や殿下の都合で中止となりました。シンポジウムにあわせて高円宮殿下の写真展が開かれ、主催者からバードウォッチング前に高円宮ご夫妻に会うか？と聞かれました。翌朝、全く面識の無い殿下ご夫妻にお話しすることに不安を感じていたので会うことにしました。当日、テープカットの後、高円宮殿下の案内でモロッコの王宮で飼育されているワニや世界各地の野生動物の写真を楽しく解説してもらいました。

その後、一ヶ月ほどで高円宮様は亡くなりました。もしも、お話しする機会が無かったら、バカ殿様の気まぐれに振り回された、と今日まで良い印象を持たなかったでしょう。講演の当日、昼食の弁当を食べながら、午後の警備の話で盛り上がりました。会場に入るには空港並みに金属探知機が使用されるとか、野鳥の会前静岡支部長が事前申し込みをしていなかったため入場出来ないようになったとか、明日のエクスカースョンで妃殿下が登られる櫛形山の終点近くに。万一を考えて県警がヘリポートを作ったことなどを聞きました。無事講演会も終わったのですが、この事で思い出したのは「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」と言う言葉です。誰が言ったかは異論がありますが私は「人は人の上に人を作り、人の下に人を作りたいがる」動物であると思いました。過剰な警備を嫌った高円宮殿下の思いは忘れ去られ、機密保護法成立などを考えると、社会全体が窮屈な時代に入ったと思いました。ライチョウ保護、自然保護等言うことさえはばかれる時代にだけはして欲しくないそんな気持ちで帰ってきました。』

2015 年第 16 回ライチョウ会議静岡大会が静岡市で開催されました。乗鞍岳から採集されたライチョウの卵を上野動物園と富山ファミリーパークへ運んで孵化させる事業が始まりました。卵の輸送などと大して気にしていなかったのですが、実に慎重な作業が行われたことを知りました。そして富山市ファミリーパークでは 3 羽が孵化しましたが上野動物園では失敗したようです。その後、上野動物園始め成功例も多くなっています。そして、今回の第 18 回新潟妙高大会となりました。

今回も一日目のシンポジウムでは県上げての行事と言った感じで特別講演では高円宮妃久子様の「鳥を通して地球環境を考える～バードライフインターナショナルの活動～」、女優工藤夕貴の講演がありました。二日目のワークショップでは地元、火打山でのライチョウの生息状況が報告されました。地球温暖化の影響と考えられる、背の高いイネ科の植物が茂り、ライチョウの食物となる高山植物群落が減少していること、シカやイノシシによる植生の破壊、天敵のキツネやテンの増加など多くの問題が指摘されました。この火打山でライチョウが発見されたのは 1952 年、以後 40 年間は 10 縄張り 20 羽ほどで安定していた。2009 年北アルプスからの移入により一時的に増加、縄張り数 18、繁殖数 41 となった。♀が分散するため一夫二妻の例が観察された。この前年は梅雨明けが早く乗鞍岳など他の山でも繁殖率が良かったためという。2009 年以降、数の減少と共に一夫二妻は見られなくなったと言う。そして今年 2018 年は 6 縄張り 15 羽となり、この 50 年間で最低となったそうです。

火打山の集団は北アルプスと南アルプスに分化した中間に位置する日本のライチョウの祖先集団の生き残りと考えられ、存続が危ぶまれています。地元、新潟県、妙高市共にライチョウ保護に対し、熱心に取り組んでいると感じました。そしてライチョウを県鳥としている我が岐阜県の後進性は一体どうなっているのかと考えさせられました。

その後、11 月 3～5 日と日本野鳥の会中部ブロック会議に再び新潟と佐渡を訪れ、トキ保護センターの全容を視察することが出来ました。そしてトキ保護の 50 年の歴史が新潟県にはあり、同時期、我が岐阜県は県知事自ら禁止されていたカスミ網猟の復活運動をやっていたという情け

ない伝統があったのです。今回の会議にも岐阜県の関係者の出席は無く、ますます時代の流れから取り残されてゆくような悔しい思いが募りました。**2020 年にはライチョウ会議岐阜**が予定されています。何とか岐阜県が主導して会議が開催されるよう当会始め、会員の皆さんの声を届けて行きたいと思っています。

2018 年 12 月 24 日

飛驒の峠【その 7】

木下喜代男

笈破（おいわれ）峠—花嫁が越えた峠には、男女の神様が残っておられた。

変わり者の筆者は、近年道がついている低山には食指が動かず、ヤブに埋もれてしまった峠道を好んで歩いている。今頃になって、大垣の登山家故高木泰夫さん著『ヤブ山登山のすすめ』の世界に入ったともいえるが、民俗学的な興味の伴う点が少し違う。往時をしのびながらヤブを漕いでいると、突然昔のままの道が現れたり、峠に残っておられる石仏に出会えた時の嬉しさは格別だ。

前回書いたように、2018 年 5 月 6 日旧笈破集落から笈破峠（笈破側では伊西峠と呼ぶ）へ向かったものの、猛烈なヤブに阻まれて中ほどで断念した。今度は反対側の山野村（山之村）からヤブを漕いで登った結果、念願の峠に到達することができた。

5 月下旬のよく晴れた日、双六川沿いから大規模林道（旧鎌倉街道）を山吹峠へと登り、新緑に覆われた山野村へ入る。笈破峠入口の伊西集落へは、森茂集落からまた自動車の小さな峠を越えねばならない。かつて 30 戸あったという伊西集落は、現在 3 戸を残すのみで、限界というより消滅に近い集落になっている。峠の登り口を聞くため A さんの家へ寄ったところ山菜採りと間違えられたが、目的を告げたら快くルートを教えてもらうことができた。近年通った人はいないので荒れていて歩行は難しいだろう、そして熊や猪が多いということも。

県道端に駐車し、崩壊した家のそばから入る。（写真 1）いきなりヤブが待ち受けており、前日の雨が笹などに残ってていずぶ濡れになりヤブを漕ぐ。かつて牛や馬も通ったという谷沿いの道は崩れたり、谷水に流されたりしてルート判断に時間がかかったが、文明の利器 GPS の助けを借りて上部へ。

谷を離れるとヤブの中にしっかりした道が残っていたが、（写真 2・3）日が当たるところは筆者の背丈より高い太い笹がよく茂り、かき分けるのに力がいる。体力と根気がいるのは、冬山登山のラッセルに似ている。ジグザグ道を登るとようやく笹に覆われた峠に到着。

あるはずの石仏を探す、見つからない。ヤブの中に木をくりぬいた祠があるのを見つけ、転がして元の石の台座へ戻す。熊の仕業かも知れない。さらにヤブの中を歩き回っていたら、四角い石が半分くらい埋まっているのを発見。（写真 4）裏返



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4

してみると、小さい男女の神像であった。

安曇野の道祖神は微笑んで仲良く手をつないでおられるが、それとちがって威厳のあるお顔だ。さっそく水筒の水できれいに洗って祠へ戻ってもらい、ザックにあった飴玉をお供えて参拝。(写真5)



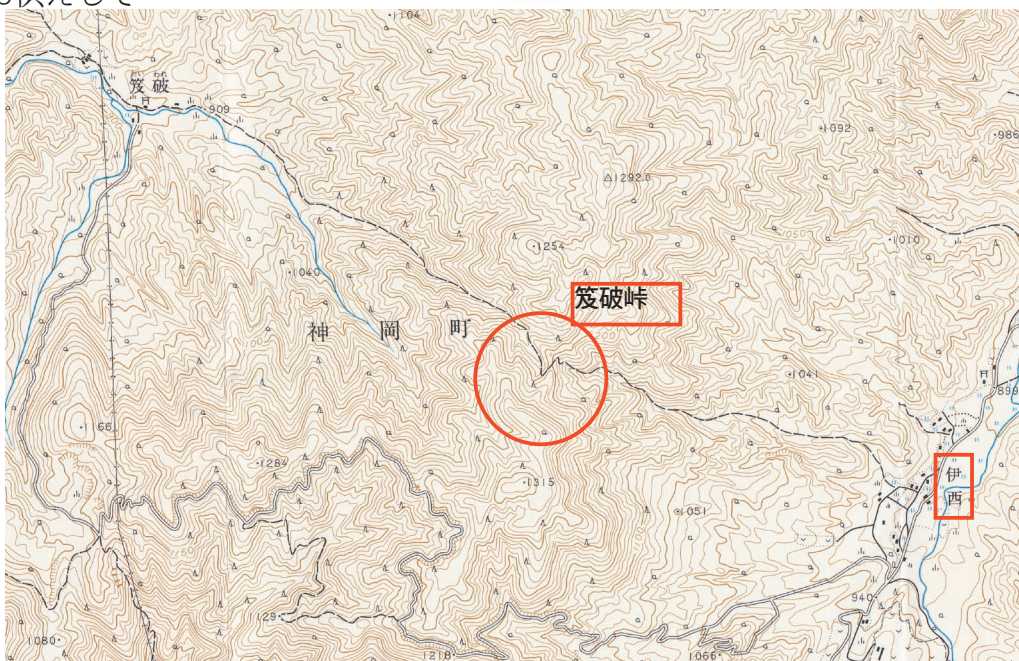
写真5



写真6

周知のとおり「峠」の字の語源は「手向け」という言葉が転訛したといわれるが、往時村人がこの石像に野の花などを手向けて道中の無事を祈ったことだろう。

旧笈破集落側にとって見たが、ヤブに埋まっているもののしっかりした道が残っていた。この峠道



はどちら側も谷沿いが荒れているが上部は形状が残っていることがわかった。峠からは木の間越しに北ノ俣岳などの稜線が見えた。(写真6)

かつて花嫁御寮が越えたときはどんな装いで、牛にでも乗っていったのだろうかなどと考えながら往路を戻る。集落へ戻り A さん宅へ寄るとご主人は留守だったが、奥さん(78歳)が今朝採った笹の子の皮むき作業をしておられ、峠のことを聞くことができた。

「昔は笈破集落へ、あるいは高原川沿いへの用事によく利用され、牛馬も通った道だった」

「私は子供の頃峠を越えて笈破集落へ田植えの手伝いに行かされた」

「一人で使いに行ったこともあるが、たいへん寂しいというより恐ろしかったことを覚えている」

「笈破集落と山野村間には嫁のやりとりがあり、皆歩いて峠を越えた」などなど。

石像のことを話すとたいへん喜んでおられた。ここもおそらく筆者が最後の旅人であり、峠道は遠からず山に還ってしまうのであろう。

(現地調査日:平成30年5月20日)

御嶽山は、飛騨山脈で中部山岳なり

小野木三郎

乗鞍岳と飛騨の自然を考える会が、会として重視・注目すべき視点、行動課題を提示する事によって、会そのものの活動の活発化を願いつつ、初夢物語りを綴ってみました。会員各位の皆様、ご笑覧下されば幸甚です。

1. 何処へ向かうのかチャオ？

チャオ御嶽スノーリゾートが名称をチャオ御嶽マウントリゾートに変更され通年型のリゾート地に向かい、昨夏には星空観察も当て込んで夜間のゴンドラ運航があり、土日にはバイオリン演奏やクラシック歌手の音楽会、頂上レストランの開店などと、再生が目指されました。再出発ぶりをみようとして8月中旬に訪れてみたところ、日曜日なのにゴンドラはほとんど空で運行、山頂駅のレストランは名ばかりで昼食のメニューは一品あるのみでした。東京から来演の女性バイオリン奏者3人の音楽会は、私たち4人の他7～8人の観客と言う淋しさ。マウンテンリゾートへと名称は変更されたものの、御嶽山継子岳への登山口は草ぼうぼうで案内板すら無く、誰にもわからない状況でした。

経営不振で当初開発主のJR東海が去り、全国的にスキー場経営を展開しているマック・アース(株)が引き継いだものの、そこも5年で去りやっと3番目に乗り出したのが「優福家」でした。優福家は関東を中心に旅館や別荘地のプロデュースを行っているがスキー場経営は初めてで、通年で楽しめるマウントリゾートとしたものの、再出発かと思いましたが中核のスキー場の冬期営業は見送られ3月以降の春スキーでオープンとの事、何ともお先真っ暗な状態のようです。第1期工事としてチャオ御嶽スノーリゾートが造成されるまでのいきさつ、反対運動については岐阜県自然環境保全連合刊行「御嶽山の自然～世界的な自然遺産」がありますので、それを参照下さい。その中で予測・指摘したように、結果は私たちの心配した事態に陥り先行き白紙になりそうです。

2. とんだ” まやかし” の自然保護への配慮

わずかに残された自然の聖域である標高2000m以上の亜高山帯針葉原生林には手をつけず、厳正に保全すべきという岐阜県の調査報告書も刊行されている事実をも無視して標高2200m近くの高所までスキー場開発をする事は許されないというのが、反対する岐阜県自然環境保全連合の立場でした。結論的には各新聞が一面でも大々的に報道したように、御嶽山を県立公園化する事で、自然保護に配慮!!と、一期工事でチャオ御嶽スノーリゾートが実現したのでした。

ところが公園化されて何が変わったのでしょうか。スキー場造成のために失われる針葉原生林が少しでも減少したのでしょうか。県立公園とは、その中身をご存知ですか。国立公園、国定公園よりも格が下です。自然保護策の厳しい「特別保護地区」の指定はありません。特別保護地域1種～2種～3種、そして普通地域という地種区分があります。ところで自然公園の普通地区は何の規制も無いのです。この御嶽山の場合、問題はその地種区分の実態です。スキー場その他のリゾート開発にかかわる諸計画、企画場所は全て普通地域に地種区分されているのですから、名前だけが御嶽県立自然公園と呼ばれるようになっただけで、開発内容は全て温存されているのでした。とんだまやかしの自然保護への配慮だと怒れてきませんか。失われた亜高山帯の針葉原生林は、いったい誰のものだったのでしょうか。世界的な自然遺産であった針葉原生林は、そう簡単に取り戻せるものではありません。

3. 御嶽山はなぜ、『中部山岳国立公園』じゃないの？

中部山岳国立公園とは、乗鞍岳以北の山々の事ですからその南に位置する御嶽山は中部山岳の一つだとは思っていない人が多いのではないのでしょうか。話は全く逆で、中部山岳の中の一つの名峰「御嶽山」が何故国立公園に入っていないかを問うべきです。そもそも中部山岳とは？飛驒山脈とは？日本アルプス、北アルプス、中央アルプス、南アルプス・・・とは一体何のことでしょうか。

イギリス人ガウランドが、飛驒山脈の槍ヶ岳に登り、景観がヨーロッパアルプスに似ている事から「日本アルプス」と記した事、後にW・ウェストンがイギリスで出した著書「日本アルプス・

登山と探検」で決定的に一般化したのが日本アルプスで、当初は飛騨山脈を示していましたが、後になって区別して本曾山脈・中央アルプス、赤石山脈・南アルプス、飛騨山脈・北アルプス、三アルプスの総称が日本アルプスとして用いられるようになったものです。

本家本元の W・ウェストンの名著「Mountaineering and Exploration in the Japan Alps」日本アルプス登山と探検（山崎安治他訳：日本山岳名著全集 1、あかね書房）を見てみましょう。第 13 章は、御嶽山の登山記で、「下山してから～～～ぼくたちは権兵衛峠を越えて甲州街道に出て富士川を下って神戸に帰った。こうして日本アルプスに別れを告げた・・・」と書かれています。W・ウェストンの頭の中では御嶽山は日本アルプスの一つの山岳、飛騨山脈の一つの山岳だったのです。W・ウェストンのもう一つの著書「The playground of the Far East」（水野勉訳「日本アルプス再訪」、平凡社ライブラリー）を見てみましょう。「北アルプス」とははっきり明記して、その概説として「日本海から始まって中山道沿いの雄大な信仰の火山、御嶽山まで、100km にもわたってほぼ北から南へ延びる大山塊を含めている。」「日本の山岳巡礼クラブ、その最も有名な『御嶽教会の奥の院』は北アルプスの最南端の山、・・・有名な火山御嶽山の頂上に建っている」と述べています。ちなみに山と溪谷社刊「世界山岳百科事典」の飛騨山脈の項目を引くと「→北アルプス」とあり、「長野、富山、岐阜の三県にまたがる飛騨山脈の別称（中略）乗鞍火山帯は立山をはじめ乗鞍岳（3026m）、御岳（正しくは御嶽ないしは御嶽山 3063m）などの高山があり～～～」とあります。以上の文献資料を引き出すまでもなく御嶽山は飛騨山脈の南端にあるとするのが妥当です。氷河期からの遺存生物であるライチョウは本州中部のみの高山に生息し御嶽山では 50 ほどの縄張り 120 羽ほどの生息数が推定されています。乗鞍岳以北の生息数を考えに入れば、御嶽山は生物相的にも飛騨山脈の南端に位置する山岳とするのが当然です。

以上の如くに見てくると、自然地理学・自然史の視点からすると御嶽山は当然中部山岳国立公園に含まれるべき名峰・名山であるのに、チャオ御嶽スノーリゾート開発反対運動に伴って、やっと格下のまやかしか県立公園化がされただけの事でした。日本に 3000m を越える高嶺が 21 座存在し、御嶽山を除く全てが国立公園に含まれているのに御嶽山だけが蚊帳の外に置かれたのはどんないきさつだったのかは究明されるべき課題であります。

※続きは誌面の都合上次号（76 号）に掲載します。

■ 会員を募集しています！ 年会費＝個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円
あなたの知人、友人に入会をおすすめてください
・郵便振替 00800-8-129365 振込先 乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 第 75 号（冬号）2019 年 1 月 25 日 発行

発行者 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会 〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町 4-218-3 飯田 洋

TEL：0577-32-7206・FAX：0577-32-7207

下記 URL のページからくらがね通信のバックナンバーが閲覧できます。

★ <http://iidalaw.net/norikura.html>

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

■ 編集責任者：松崎 茂

E-mail: ponykun0428@hidatakayama.ne.jp TEL：0577-34-4703

表紙写真提供：小池 潜

印刷：山都印刷
